
さかさまな世界

風霧 迅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さかさまな世界

【Nコード】

N2959BA

【作者名】

風霧 迅

【あらすじ】

「日本に行って勉強してこい」主人公久遠は、十に言われ、日本並盛中に通うことになる。※舞台はリボーンですが、主人公は転生者ではありません。元々リボーンの世界にいた人物です。

自己紹介

名前	若色 久遠
フリガナ	ワカイロ クオン
性別	女
一人称	ウチ
誕生日	4月1日
髪の色	黒
目の色	黄緑
髪型	サイドテール
血液型	？
所持品	携帯 財布
身長	165
備考	

幼い頃捨てられてしまうものの、十に拾われる。
戦闘、暗殺術を十達に習う。
十に学校に通うよう言われ日本に来た。
十が、マフィアをしていることは知っている。

名前	十 荔枝
フリガナ	モギキ レイト
歳	27
性別	男
一人称	オレ
誕生日	12月24日

髪の色	黒
目の色	赤
髪型	ロング
血液型	A
所持品	携帯 財布
身長	185
備考	

久遠を育てた張本人。
 アンネナレーファミリーのボス。
 他に10人の部下がいる。
 「凶劇^{カルマ}」という二つ名がある。

名前	神崎 里桜
フリガナ	カンザキ リオ
性別	女
一人称	私
誕生日	9月9日
髪の色	茶色
目の色	赤
髪型	ショート
血液型	O
所持品	携帯 財布
身長	153
備考	

トリップ者
 裕福な家庭だが、家庭内暴力があったりしたので家出をした。

お願いとして最強設定をつけられている。

始まり

「日本に？」

「そう、まあ日本の文化とか違った場所で学ぶのもいいだろう」

十じゅうさんの提案には正直驚く。

まあ、良いかもしれない。

日本は一度行ってみたかったところだし。

「引っ越しの手続きとかは、もうしてあるから安心しろ」

「…速いですね。やることが」

「場所は並盛だ」

…あれ？　ウチの記憶が正しければ。

「確か、ボンゴレ十代目候補もそこに住んでいたような…？」

「そうだ。別にアレを守れという指令ではない」

アレ扱いですか…でもまあよかった…。

「明日には、行くからな」

「分かりました。早速荷物のまとめをします」

十さんのいた部屋を後にして自分の部屋に戻る。

並盛か…いったいどんな街だろう。

そもそもウチは恥ずかしいことなのだが、一人でロクに外に出たことは無いのである。

いつも、ファミリーの皆と一緒に近くの市場に出かけるくらいだったし、

日本という遠く離れた地に行くのは不安である。

しかも片手で数えられるほどの回数しかない。

強くなるためにひたすら修行していたことが原因である。

「ファミリーに入るのだから、強くないとだめだ」という十さんの言葉で、やることになったのである。

5歳の時に拾われてから、暗殺、戦闘術を一通り学んで自分なりの戦いを身につけたり、

今思い返すと、アレは拷問に近いと思う。

そもそも、規格外の強さを持った人たちが多いと思うこのファミリー。

体から“死ぬ気の炎”なんていう不可思議なものを使って戦った

その炎に“甲兵器”というものに注入すると、動物とかが出てきたり…。

普通の人たちはそんなことはできないと願いたい。

「平和なところでありますように…」

コンコン

「ごめんね、遅くに」

「どうしたの、レイアー？」

ドアを開けたのは、銀色の髪に花の髪飾りをつけた女性。

彼女もアンネナーレファミリーの一人である。

「日本に行くのって本当？」

「うん」

「じゃあ、これ…」

渡されたのは、十字架のネックレス。

赤い宝石が埋め込まれている。

「え…いいのこれ？」

「がんばってほしいから受け取って、お守り」

「ありがとう」

こういうことをしてくれるのは彼女ぐらいである。

他の皆は、優しさの微塵もない鬼である。

戦闘にしか興味のない人たちだからな！。

「じゃあ」

「がんばるね」

さてと…荷物のもとめをしないと。

まず服は…並盛で買えばいいよね。

一応5着だけにしよう。

それと本にアルバム…装飾品ぐらいかな。

「できた…」

これでよし。

キャリアバック一つにまとめられた。

これで眠れる。

到着

「ここが…並盛」

日本空港を出て、タクシーで並盛町に乗りついでここまで来たが

うん、平和。

言葉に表すと平凡というのだろうか。

でもそれがいい。

皆はとても楽しそうな顔をしているから。

「まあ、ファミリーの皆みたいに、非常識な人たちはいなそう」

そういえばふと疑問に思ったのだが、中学生で一人暮らしは有なのだろうか？

普通は高校生がするものってテレビで見たんだけど。

まあ大丈夫か。

さて、まだ時間もあるし観光とか、何かいいものがないか探しますか。

雑貨屋もあることだし。

キャリーバックを引きずりながら人ごみの中を歩いていった。

＊

「…でかくない？」

十さんに渡された地図を頼りに歩くと見つかり、

今度から自分の家になるマンションを見ての第一声はこれ。

（不本意だが）一人暮らしには大きすぎる3LDKのマンション。

一体どうしてこんな大きなマンションを選んだのか疑問に思う。

無駄にお金があるからなのだろうか？

紙に書かれた部屋番号を確認しながら中に入って行く。

因みに七階建ての最上階だ。

そしてドアを開けようとしたのだが、可笑しいと感じた。

人の気配がするのだ。

しかも、ウチのよく知っている気配。

……なんだろう、嫌な予感。

とりあえず、中の様子を見ないことには変わりはない。

ドアを開け、リビングに行く。

その人物は、ソファに腰かけて読書をしていたらしい。

そして、ウチに気がつくとは気ない風に声をかけた。

「やあ、久しぶり」

「……………」

思わず絶句した。

なぜイタリアにいるはずの人が日本——しかもウチの家となる場所にいるのだろうか。

これは幻覚、きっと悪い夢を見ているんだ。

そう思っていたらいきなりナイフが飛んできたのでとっさに避ける。

ズダダダッ

勢いよく突き刺さったナイフをみて思わず額から冷や汗が流れる。

さっそく壊す気満々!?

「恐っ!?! いきなりナイフ投げないで!」

「君が無視するからじゃないのかなあ?」

「だからといえナイフは無い!」

もし避けなかったら、あのナイフの餌食になっていたところだろう。

そう思うとぞっとする。

というかあの気色悪い笑顔…確実に当てる気満々だった。

キモイ、変態率が確実に上がってるよ。

せっかくの美形が台無しじゃん。

「…で、どうしてここにいるのかな————フロド？」

現実逃避も失敗に終わったので、質問に入るとしよう。

彼の名は。フロド・ダストール。

彼もファミリーの一員なのだが、十さんと並ぶ最強の人。

強い奴と戦うことを生きがいに行っている変人でもある。

ウチもその部類に入っているらしい。

二つ名も「ザットオブジェクト昏睡嗜虐」という恐ろしく中二病じみた名前をもっている。

「ああ、十に言われてね。『保護者の代わりとして一緒に住め』って」

「ウチの一人暮らしオワタァー！」

両手で顔を覆う。

悲しい…考えてみるとウチの人生も、もろオワタな感じがする。

そもそも、保護者選択間違ってる！

レイアーとかちよつと危険だけどウェントぐらいの人物とかマシな人いたよね！

何があった！？ 皆、任務とかで忙しかったの！？

見捨てないでほしかった！

最終的にフロドを選んだとかなに考えてるの、あの人！

「これからよろしくね」

「よろしく…」

したくないけど。

「部屋は、玄関から右側奥だから」

「ハハハ！　じゃあね！」

脱兎のごとく駆けだして自分の部屋に入る。

ヤバイ…ウチの精神がすごいダメージを。

あの変態め…おそろいなホント。

気を取り直して………とりあえず荷物整理でもしますか。

学校

朝、時差ボケをせずに起きた。

寝坊なんてしたら遅刻しちゃうからね。

さて…学校に行く準備しなくちゃ――――あ。

ふとあることに気付いた。

「制服…受け取りに行くの忘れてた……！」

ウチの馬鹿！

うわぁ…マジでどうしよう。

似た感じの服で行こうか。

リビングで一人唸っていると、ガチャリとドアを開ける音。

フロドが入ってきたようだ。

視線を上げ彼を見ると…なぜか小包を片手に。

「久遠、昨日渡し忘れていた制服と生徒手帳とスクールバック」

こいつのドテツ腹に一発殴ろうかと思った。

ウチの時間を返せ。

「……心配して損した」

問題も解決したから着替えよう。

部屋に戻り、着替え始める。

……ス、スカート短っ。

長いほうがウチ的にはよかったのに。

バックに、筆記用具とノート生徒手帳を入れて……よし。

玄関へと向かう。

おっと、忘れてた。

フロドは殺戮主義者だけど一応は家族だもん。

挨拶ぐらいはしないとね。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

＊

「下見してよかった」

呑気に歩きながらそう呟く。

観光と共に今日から通う並盛中を昨日見てきたのだ。

物の十分で道に迷うことなく、無事に学校にたどり着いた。

まずは職員室だね。

にしても、名前に『並』が入ってるだけあって、普通の学校だ…。

「あった。失礼します」

ガラッと扉を開けて職員室に入る。

「今日から転校してきた若色久遠です」

軽い自己紹介すると、一人の教師がうちの方に近づいてくる。

「早かったな。お前のクラスの担任だ」

「どうも」

「君のクラスは1・Aだ。」

もうすぐH Rの時間だからついてきなさい」

「はい」

「じゃあ、呼んだら入ってこいよ」

「分かりました」

数秒すると男子が騒ぎ出した。

何があつた男子。

「入ってこい」

ガラッと扉を開けて教卓の前まで行く。

「じゃ、自己紹介をしろ」

「若色久遠といいます。家の事情でイタリアから並盛に来ました。よろしく願いいたします」

ん？ 殺気が…。

さっきのものと見てみるとそこには悪童獄寺が。

何で殺気に向けられているんだろう？

それに…なんでボンゴレ十代目候補もいる？

なんか平和な日常をぶち壊される予感が。

「じゃあ、若色の席はあそこだ。窓側の席」

危ない。

別世界にトリップするところだった。

窓際か…まあまあいい席。

「じゃあ、H R ルームを終わるぞ」

すると同時にポケットに入れていた携帯が震えた。

新着メール一件？ 相手は——十さん？

何々：

『ボンゴレ十代目がどんな人物なのか。』

どんな小さなことでもいいから情報をメールで送ってくれ』

十さんの指令が。

断る理由がないから『ok』で送信っと。

＊

時間はたちお昼の時間。

ウチは屋上に来ていた。

え？ 理由？

お昼の時間になったときにボンゴレ十代目が教室から出ると悪童もそれを追うように、

教室から出たんだよ。

気になったもんでウチもそのあとを追ってみると、あの二人がバトルをするという話が聞こえてきて、

それを見たいから、見晴らしのいい場所——つまりは屋上からよく見えるという判断で、

ここにいるというわけ。

「でも、部外者がいるんだよねー」

短髪の女子。

そういえばあの女子もウチに向けて殺気を放っていたね。

何でかは知らないけど。

「…リボンもいるし」

二頭身ぐらいで黒帽子をかぶった赤ん坊——リボン。

情報によれば十代目の家庭教師をしているんだっけ？

『死ぬ気で消火活動……!!』

死ぬ気弾を十代目に撃ったねりボーン。

額からオレンジ色の死ぬ気の炎が燃え上がっている。

属性は大空か。

ボスとして当然の属性だね。

『二倍ボム!』

と悪童の投げたダイナマイトをボンゴレは素手で消していく。

さらに、『三倍ボム』を放とうとするが、未完成らしい。

ダイナマイトが一つ手からこぼれおちた。

それに続くように他のダイナマイトも落ちていく。

爆発…いやボンゴレが消した!?

『消火活動』を目的として死ぬ気になったボンゴレは、

悪童の周りに落ちたダイナマイトの火も消していく。

ふむふむ…やるな。

『御見逸れました！！！　あなたこそボスに相応しい！！！！』

おお、忠誠かな？

今のうちにメールしよう。

『ボンゴレ十代目は、大空の炎を使う。

あと、悪童スモークンボムと戦ってボンゴレの勝ち。

悪童は十代目に忠誠を誓った模様』

送信っと。

さて、ウチはあの短髪の女子について調べないとね。

おにぎり

学校を2日間も休んで、部屋にこもりっ放しのうち。

学校が退屈だからって不登校になったわけではない。

休んでしまった理由は一人の少女にあった。

「……なんで？」

どうして、情報が出てこない？

パソコンのキーボードを打ちながら考える。

あるときボンゴレと悪童の近くにいた短髪の少女の名、

——「神埼里桜」を打っても“エラー”。

名前と歳、性別はでるのに家族構成や学歴が不明なのだ。

そして一番の驚き——戸籍がないこと。

どのファミリーにもいないし、組織にも所属していない。

表裏どちらを調べても全く出てこないし、あつた存在も消した存在もない。

まるで——元からこの世界には存在していなかったように。

なんで…彼女はいったい何者？

「…鬼百合に頼むか」

鬼百合とはファミリー一の情報操作がとても上手い人。

国家のハッキングや、ウイルスをまくのはお手の物の男性。

神埼里桜のことは彼にお願いしてみよう。

そう思い、パソコンを閉じてベッドに入り眠りについた。

＊

「うーん、今日は家庭科実習か…」

そもそもおにぎりというシンプル過ぎる料理。

どうした、そんなにめんどくさかったのか。

なんていろいろ突っ込みたいところだけど…ここは我慢しとこう。

なに味にしよう。

無難におかとか鮭かな？

そして――――

「今日は家庭科実習で作ったおにぎりを」

「「「男子にくれてやるーっ」「」「」

うーん…ウチはあげないかな？

だってお世話になってもないし。

あれ？ 変なおいすると思えば笹川さんのおにぎり…すごい毒々しい色になってるけど。

もしかしてポイズンクッキング！？

こんなことができるのは、あの毒サソリだけ。

まさかいるの、学校に？

キヨロキヨロとまわりを見える。

っげ。ドアのところにいた。

まさかボンゴレを毒殺しようとしてる？

「食べたら死ぬんだぞ————っ！！！！！！！！」

「！」

「ツナ？」

気付いたか、ボンゴレ。

あ、死ぬ気弾が撃たれた。

どうでもいいけど狙撃の場所遠くない？

そして現れるは相変わらずパンツ一丁という変態っぷり。

クラス奴らのおにぎりを搔っ攫って無差別に食べまくるボンゴレに、

周りは「変態！」だとか悲鳴上げてる。

その時だ。ボンゴレがくるりとこつちを向いて――

…目、合った。

「まだたりねー!!」

聴こえてるってのに叫びながらこつちに飛んでくる。

正直に言いましょう。キモイ。

「…うわー」

もちろん棒読みの悲鳴を上げ、不自然に見えない程度に頭を抱えてしゃがむ。

死ぬ気のボンゴレがいきなりのことに対処出来るわけもない。

見事に壁に衝突。

ずるずると落ちていくボンゴレの額からわずかに煙が見えるから、

死ぬ気タイムは終わったんだろうね。

嗚呼メンドイ。

「いってー！！」

「ツナ！！」

「大丈夫ですか！？ 十代目！」

痛がる沢田に神埼達が駆け寄っていく。

あれ？ つか皆さん、被害者は無視ですか？ まあ丁度いい。さ
つさと屋上に行こう。

屋上だったら誰に邪魔されなくて済むし。

「待って！」

「……何？」

屋上に行こうとすればなぜか神埼に呼び止められた。

出来るだけ嫌な顔をしないようにしてれば、声が少し低くなってしまった。

何せ正体不明の人物。

何をされるのかは分からないからだ。

「大丈夫？」

「何ともない」

淡々と返して、改めて屋上に向かった。

＊

屋上で、おにぎりを一人で食べていると、ポケットに入っていた携帯が震えた。

「っと、メール」

鬼百合さんからだ。

神埼のことについてかな？

『クーの言う『神埼里桜』の情報は全く出てこなかった。

しかも不思議なことに、なにも問題がなかったように周りには気にしていない。

まるで、元から居たみたいにな。

某の予想だが、別世界からきた異物だな。』

……別世界？

何それ。意味不明。

『…すごい壮大な話だね。

とりあえず要注意人物として観察してみるよ。

十さんにも伝えといて。

観察対象及び危険対象が増えたって』

送信っと。

さーって、がんばりますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2959ba/>

さかさまな世界

2012年1月11日20時01分発行